エピグラフ（epigraph）と社会学
―― G.C. ホーマンズの社会学の場合――

橋　本　　茂

序

エピグラフ（epigraph）とは，著者が本の冒頭に置く引用文のことを言う。日本語では，引用句，題辞，銘句などと言われる。それは，著者の発想の根拠を示唆したり，要点を示唆したりするものである。しかし，すべての著書がエピグラフから始まるわけではない。それは著者の好み次第と言えよう。

私が長く研究してきた社会学者G.C.ホーマンズは，その主要な著作の冒頭に，有名な著作からの引用文をエピグラフとして置いている。

本稿ではこのエピグラフに焦点を据えて，ホーマンズという人物の多才さ，また，彼の多彩な人間関係，そして，彼の社会学理論の特徴などを見ることにしよう。

ホーマンズの著作のエピグラフを考察する前に，簡単であるが，ホーマンズの社会学的な歩みを見ておこう。

1　ホーマンズについて

ホーマンズ（George Casper Homans 1910-1989）は非常に多彩で優秀な人々（文学者，哲学者，生理学者，人類学者，数学者，歴史学，経済学者，社会学者，自然科学者等）と日常的に交わり，これらの人々から多くの影響を受けて社会学者になったユニークな人物である。

1910年，彼は二人の大統領（二代目大統領ジョン・アダムスと六代目大統領クィンシー・アダムス）を父祖にもつボストンの名門に生まれた。いわゆる，WASPであり，ボストン・ブラーミンであった。

1928年，ハーバード・カレッジに入学し，英米文学を専攻した。

この時代のアメリカは恐慌のために経済的政治的な危機の状態にあった。若い学生たちの多くはマルクス主義の影響を受け，アメリカの資本主義体制を批判した。ボストン・ブラーミンと言われる裕福な階級のホーマンズは仲間の学生からその富は労働者からの搾取によるものであり，それを労働者に返せと攻撃された。このような攻撃を受けて困惑していたホーマンズに，２年生から４年生まで彼の読書や科目選択を指導していたチューターのデヴォート（Bemard DeVoto）がパレート（Vilfredo Pareto, 1848－1923）の『一般社会学』（*Trattato di sociologia generale,* 1916）を読むように勧めてくれた。その読書を通して，搾取を説くマルクスの剰余価値の理論は全くの合理化であり，搾取などは知的たわごとに過ぎないことを教えられ，苦境から逃れ，パレートの合理化論を用いて反撃に出た。「パレートの社会学は私の内部に溜まっていた沢山の無知を一掃してくれ，……私を守ってくれた」（Homans, 1962, p.4）のである。彼はそれが社会学であるからではなく，自分を無知と苦境から解放してくれるという理由で，パレートの社会学に没頭した。４年生の時には，パレートの大部の『一般社会学』のフランス語訳を読破していた。

1932年，卒業論文「モビー・ディックとピエールとマーディ」（“Moby Dick, Pierre and Mardi”）を書き上げ，英米文学科を卒業した。その論文は最優秀賞を受け，『季刊イングランド』に掲載された。

卒業後，彼は新聞社に就職することになっていたが，その新聞社が大恐慌の煽りを食らい経営難になり，内定が取り消され，失業の身となった。

ところが，この年（1932），生化学者かつ科学史家であるヘンダーソン（L.J.Henderson, 1878－1942）の主催する《パレート社会学に関するゼミ》がハー

バードの錚々たる学者を集めて開講された。彼のチューターであったデヴォートがヘンダーソンのかつての学生であったこと，彼の勧めでホーマンズがパレートの『一般社会学』を読んでいたことが縁となって，ホーマンズはヘンダーソンの助手としてゼミに参加した。そして，カーティス（Charles P. Curtis）との共著『パレート入門』（*An Introduction to Pareto, 1934*）を出版した。実際は，ホーマンズが執筆したものであった。その著は初めての英語によるパレート紹介であり，ヘンダーソンも認める好著であった。

1933年，ヘンダーソン，ローウェル（A. Lawrence Lowell）学長，哲学者ホワイトヘッド（Alfred North Whitehead），カーティスらによって，天才的な才能を持つ若者が，学則の縛りを受けず，また，生活も保証されて，自由に研究に専念できる研究所《ザ・ソサエティ・オブ・フェローズ》（The Society of Fellows）が設立された。ホーマンズは一回目の研究者募集に，詩人として推薦され応募したが，選ばれなかった。

1934年，第２回目の研究生募集で，その所長であったヘンダーソンの推薦で社会学者として応募した。ホーマンズの執筆した『パレート入門』が高く評価され，社会学専攻の研究生として採用された。

この《ザ・ソサエティ・オブ・フェローズ》で彼は天才的な才能を持つ多彩な人々（文学者，哲学者，生理学者，人類学者，数学者，歴史学，経済学者，社会学者，自然科学者等）と日常的に交わりを持つことになった。ここで６年間の「有り余る自由」に恵まれた，「自由な知的な交流」，真の学際的な研究生活を送った。「私を社会学者にしたのは，このザ・ソサエティ・オブ・フェローズのメンバーになったことと，その所属から得た諸経験である」（Homans, 1984, p.119）と述懐している。ここでの研究成果が，機能的人類学の方法論によって，混沌としているかに見える社会の諸側面がいかに相互に関係し合っているかを実証した『13世紀のイギリス農民』（*English Villagers of Thirteenth Century,* 1941）であった。

1939年　ソローキンの招きでハーバード大学の社会学部の専任講師になった。

1941年　召集を受けて，海軍少佐として戦線に出た。終戦を沖縄で迎えた。『13世紀のイギリス農民』が出版された。

1946年　新たに創設されたハーバード大学の社会関係学部の准教授として招聘された。ここから，ホーマンズの社会学者としての本格的な研究生活が始まった。

1950年　ミクロ社会の綜合化と言われる『人間集団』（*The Human Group*, 1950）が出版された。

1961年　交換理論の提唱である『社会行動』（*Social Behavior*, 1961）が出版された。翌年にこれまでの書きたくわえてきた論文を集めた論文集『感情と活動』（*Sentiments & Activities*, 1962）が出版された。

1963年～1964年　アメリカ社会学会会長に就任した。その時の会長講演「人間を取り戻せ」（Bringing Men Back In, 1964）はアメリカ社会学界に大きな影響を与えた。

1967年　彼の科学論である『社会科学の本質』（*The Nature of Social Science*, 1967）が出版された。

1970年　社会学部が社会関係学部から独立し，社会学部長（～1975）に就任した。

1974年　『社会行動』の改訂版が出版された。

1980年　定年退職し，名誉教授となった。

1984年　自叙伝『正気に帰る』（*Coming to My Sense*）が出版された。

1987年　1962年以降の論文を集めた論文集『確信と懐疑』（*Certainties and Doubts*）が出版された。

1988年　若い時から書きためていた詩を集めた詩集『ウィッチ・ヘイゼル』（*The Witch Hazel*）が出版された。

1989年　逝去。79歳であった。

2　ホーマンズの著作とエピグラフのリスト

ホーマンズの著作のエピグラムを全てあげることにする。

（1）『人間集団』（1950）のエピグラフ

The Ancient Emblem that represents life by the circle formed by a snake biting its tail gives a sufficiently just picture of the state of affairs. In effect, the organization of life in complex organisms does form a closed circle, but one that has a head and a tail in the sense that all the phenomena of life are not equally important although all take part in the completion of the circulus of life. Thus the muscular and nervous organs maintain the activity of the organs that make blood, but the blood in turn nourishes the organs that produce it. There is in this an organic or social solidarity that keeps up a kind of perpetual motion, until a disturbance or cessation of the action of a necessary vital element shall have broken the equilibrium or brought about a trouble or stoppage in the play of the bodily machine.

CLAUDE BERNARD

Introduction a da medicine experimentale, Paris, 1865

生命をば，自分の尾を噛んでいる蛇で出来ている環に喩えた古代の寓意画があるが，これは実に真相をうがっていると言ってよい。実際複雑な生物においては，生物の有機体は確かに閉じた輪を作っている。しかしながら，たとえそれは順次に生命循環の完成において連続しているとはいうものの，あらゆる生命現象が同一の程度の重要さをもっているものではないという意味において，その環は頭と尾をもっていると言って差支えなかろう。

たとえば筋肉または神経は血液を調製する器官の諸活動を維持し，血液はまた今度自分の方から血液を作る器官を養っている。そこには一種の永続運動を維持している有機的或いは社会的連帯があって，このものは，大切な細胞の活動が変調を来すか，または停止するかして，動物器官の活動が障害され，平衡を失うまでは運動続けている。

クロード・ベルナール

（三浦岱栄訳『実験医学序説』岩波文庫　1970　147－148頁）

（2）『社会行動』（1961, Reised Edition 1974）のエピグラフ

For a thyng, sires, saufly dar I seye,
That freendes everych oother moot obeye,
If they wol longe holden compaingnye.
Love wol nat been constreyned by maistrye.
When maistrie comth, the God of love anon
Beteth his wynges, and farewed, he is gon!

GEOFFREY CHAUCER

The Franklin's Tale

みなさん，ここでひとこと申し上げたいのです。友人同士，末永くつきあいたいなら，たがいに譲りあうようにしなければならない。愛も権力で圧迫してはいけない。支配権がでてくると，愛の神は羽ばたきして，さらばと，行ってしまうものだ。

ジェフリー・チョーサー

郷士の話

（西脇順三郎訳『カンタベリ物語（下）』ちくま文庫　1972　9頁）

（3）『感情と活動』（1961）のエピグラフ

Her grasp of appearances was thus out of proportion to her view of causes; but it came to her then and there that if she could only get the facts of appearance straight, only jam them down into their place, the reasons lurking behind them, kept uncertain, for the eyes by their wavering and shifting, wouldn't perhaps be able to help showing.

HENRY JAMES, *The Golden Bowl.*

こういうわけで，外観について彼女が把握したものは，原因についての理解とは不釣り合いなほど多かったけれども，同時にたちまち彼女を襲ったのは，外観の事実を確実に把握し，しかるべく整理することさえできれば，背後に潜みながら揺れ動く外観の陰に隠れて眼にとまらなかった原因は，おそらく姿を現さざるをえないだろう，という気持ちだった。

ヘンリー・ジェイムス

『金色の盃』

（青木次生訳『金色の盃（下）』講談社文芸文庫　2001　70頁）

（4）『社会科学の性質』（1967）のエピグラフ

I had looked for a society reduced to its simplest expression. That of the Nambikwaras was so far reduced that I found only men there.

CLAUDE LEVI-STRAUSS

Tristes Tropiques.

最も単純な表現にまで還元された社会を，私は探していたのではなかったか。ナンビクワラ族の社会がそれであった。私はもうそこに，人間だけし

か見出さなかった。

レヴィ＝ストロース

『悲しき熱帯』

（川田順三訳『悲しき熱帯Ⅱ』中公クラシック　2001　263頁）

（5）『正気に帰る』（1984）のエピグラフ

Grau, treuer Freund, ist alle Theorie
Und gruen des Lebens goldner Baum.

Goethe

Faust, Ⅰ.iv

若き友よ，一切の理論は灰いろで
緑に萌えるのは生の黄金の樹だ。

ゲーテ

『ファウスト』

（大山定一訳『ファウスト第一部』筑摩世界文学大系　1972　49頁）

（6）『ウィッチ・ヘイゼル』（1988）のエピグラフ

Compositions resembling those of the present volume are not infrequently condemned for their querulous egotism.

Samuel Taylor Colerige

Preface to His *Collected Poems*, 1828.

本著のような詩は不満いっぱいの自己本位主義だと
非難されることが少なくない

サムエル・テイラー・コウルリッジ

『詩集』への序，1828

以上が，ホーマンズの著作とそのエピグラムである。その中から，ホーマンズの社会学と直接関係したエピグラフを取り上げ，そのエピグラフを引用した文献とそのホーマンズとの関係を考察することにする。

３　『人間集団』と生理学者クロード・ベルナール

『人間集団』のエピグラフはフランスの生理学者C. ベルナールの『実験医学序説』（パリ, 1865）からの引用文である。社会学者ホーマンズと生理学者ベルナールの関係はどうして生まれたのであろうか。

（1）　ヘンダーソンとベルナールとホーマンズ

ホーマンズの略歴で見たように，彼はハーバード・カレジを卒業したが，採用が内定していた新聞社が経営難に陥り内定が取り消され, 失業してしまった。丁度その時，ヘンダーソンの「パレート社会学に関するゼミ」が開講され，助手となった。そこでの彼の実力が認められ，弱冠24歳のホーマンズは『パレート入門』を書き上げた。

さらに，同じ時期，才能ある若者が，縛りの多い学則から解放され，生活は保証され，自由に研究に打ち込める学際的な研究所《ザ・ソサエティー・オブ・フェローズ》が開設され，若手研究員として採用された。

こうして，あれよ，あれよと言う間に，ホーマンズは社会学者への道を歩み始めることになった。その導き手はヘンダーソンであった。パレートの社会学しか知らなかったホーマンズはヘンダーソンに社会学者になるためにはどうすればいいか尋ねた。ヘンダーソンは数学とドイツ語と歴史的方法の修得を勧めた。また，ヘンダーソンはエルトン・メーヨーの文献購読のコースに出るよう

に勧めた。そこで，機能主義人類学者のマリノウスキーとラドクリフ=ブラウンの未開社会に関する著作，デュルケーム（E. Durkheim 1858－1917）の『自殺論』（*Le suiside*, 1897）や『社会学的方法の規準』（*Les regles de la method sociogique*, 1895）や『宗教生活の原初形態』(*Les forms elementaires de la vie religieuse*, 1912）の著作，フロイド（S. Freud, 1856－1939）らの精神病理に関する書物を共に読んだ。

ヘンダーソン自身も，彼に重要な文献の読書を勧めた。ホーマンズの自叙伝『正気に帰る』によると，①フランシスコ・ベーコンの『随想集』（*Essays*）と『ノヴム・オルガヌム—新機関』（*Novum Orgsanum*），②にモンテーニュの『エセー』（*Essais*），③マキャヴェリの『君主論』（*Principe*），そして④クロード・ベルナールの『実験医学序説』であった（Homans, 1984, p.117）。若い研究者にベーコンやマキャヴェリやモンテーニュの本を推薦する教師は多いと思うが，ベルナールの本を必読の書として推薦する教師は稀であろう。

実は，ヘンダーソンは著名な生化学者であった。1902年にハーバード・メディカル・スクールを卒業し，その後，２年間，ストラスブルグ大学で化学の研究に従事した後，ハーバードの化学の教授になった。1908年，生物有機体における酸性-塩基均衡の数式化に成功した。彼の血液の生理的均衡の研究は，第二次大戦で負傷した多くの将兵の命を救ったと言われている。ヘンダーソンはハーバードの同僚ウォルター・キャノンのホメオスタシスの研究に大きな影響を与えたとも言われている。その時代の最も独創的な傑出した生化学者であった（Homans, 1968）。

そのヘンダーソンの業績に絶大な影響を与えたのがベルナールの『実験医学序説』であった。彼はこのベルナールの著書をアメリカに紹介した人物であった。1927年に英訳本が出版された時には，彼はその本に序文を書き，「私はアリストテレス以後，生物学者の哲学をこれほど見事にわれわれに示した書物を他に知らない」とベルナールを絶賛した。

これらの生化学での研究を土台として，ヘンダーソンの関心は，生化学の分野を越え，科学哲学の問題，また，パレート社会学との出会いによる社会システムの研究へと広がっていった。

1911年，彼はハーバードに科学の歴史の講座を開いた。そして『環境のフィットネス』（*The Fitness of Environment*, 1913），『自然の秩序』（*The Order of Nature*, 1917）を書いた。ホーマンズに言わすと，「彼の一般的な問題は，いかに自然の作用因が自然の目的因と協力するかであった」（Homans, 1968）。

1926年ごろ，同僚の昆虫学者ウィーラー（William M. Wheeler）からパレートの『一般社会学』を紹介された。パレートの科学的方法の手続きや体系論や均衡論，また，彼の人間社会についての見解が，ヘンダーソンを強力に引き付け，彼をパレートの熱心な読者にさせた。

1932年～1933年　彼はハーバードの錚々たる学者が出席する「パレートの社会学に関するゼミ」を開講した。このゼミにホーマンズもヘンダーソンの助手として参加した。ここから，ホーマンズとヘンダーソンとの関係が始まった。さらに，《ザ・ソサエティ・オブ・フェローズ》（所長はヘンダーソン）の研究員に採用される事によって，二人の関係はさらに深まり，ついには，ヘンダーソンはホーマンズにとって学問の師に留まらず，人生の師となった。

ホーマンズは，そのヘンダーソンの指導を受けながら，ベルナールの『実験医学序説』を読み，さらにパレートの『一般社会学』を読んだのである。

このような知的環境下で，ベルナールの『実験医学序説』に十分に親しんできたホーマンズはその一文を『人間集団』のエピグラフとして引用したのである。

（2）　ベルナールの生命観

さきに，私の翻訳本（1978）では，定訳と言われる三浦岱栄訳を使わせてもらったが，ここでは，ホーマンズが引用した英語訳を和訳することにしよう。この

英訳文は，多分，1927年出版英訳版から引用したものと思われる。

古代の寓意画が生命を自分の尾を噛む蛇の環（ウロボロス）によって表象しているが，それは実にうまく生命の実相を描いている。実際，複雑な有機体の生命組織は閉じた環を構成している。しかし，そこには頭と尾があるように，生命の全現象が生命の環の完成に参加しているが，それらの重要さがすべて等しいわけではない。筋肉と神経組織は血液を造る器官の活動を維持するが，今度はその血液が血液を作る器官に栄養を与える。ここには，有機的あるいは社会的連帯があり，それがある種の永久運動を維持している。しかし，永久運度と言っても，必要で重要な要素の活動の不調や停止が均衡を破壊したり，肉体的機構の働きが難しくしなったり，止まったりするまでであるが。

ベルナールは，『実験医学序説』で，次のような概念図式を提示し，それに基づいて，しかも，実験的な方法を使って，外的環境の中で存続する生物の法則の発見に努めるように提唱している。

① 「生物においては，少なくとも二つの環境を考慮しなければならない。外的即ち生物外的環境と生物内的環境がこれである。」(Bernard, 1865, 訳109頁)
② 内的環境とはすべての器官と機能とが緻密に連関しあって成り立つ「閉じた環」，ウロボロス，システム，あるいは統合体である。
③ 生物は，外的環境の中で，その内部環境を一定の範囲で安定させることによって，言い換えれば，内部環境の定常性（fixite）の維持によって，存続している。

④　その内部環境の定常性は，その構成要素（水，酸素，熱，化学物質）の条件が外部環境と緊密に関わりながらも不断に補正されることで成り立つ特性である。

⑤　生理学者・生化学者の仕事は，生物の存在を可能とさせる内部環境が安定し維持される仕組みを，すなわち，内部環境の定常性（fixite）を生み出す仕組みを，実験的な方法を用いて，解明することである（天野陽子, 2014）。

このような概念図式に基づいて，20世紀の生理学者・生化学者は，実験的方法を用いて，内部環境が安定し維持される仕組みの解明に取り組んだ。その成果として，ヘンダーソンの血液や細胞原形質の酸塩基平衡を維持する機構の数式化や，キャノンの《ホメオスタシス》（homeostasis）概念を挙げることができよう。

（3）　ホーマンズの『人間集団』

それでは，『人間集団』の概念図式について見ることにしよう。

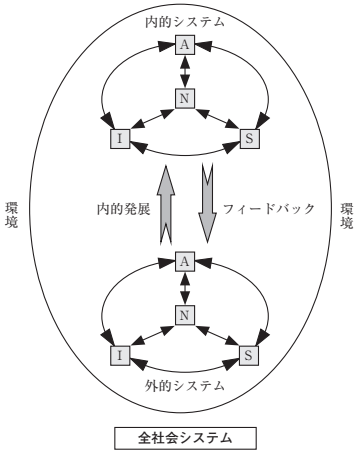
①　集団は相互作用している人よりなるが，そこでの行動は一定の要素――活動（A），感情（S），相互作用（I），規範（N）――に分けられ，それらは相互に依存し合って「社会システム」(social system)を構成する。

②　集団は環境の中に存続している有機的全体あるいは社会システムとして研究される。

③　環境によって条件付けられている社会システムの一部を「外的システム」（external system）という。

④　社会体系での諸要素間の相互依存関係は時の経過につれて体系の「進化」（evolution）をもたらす。この内的に発展する社会体系の部分を「内的システム」（internal system）という。

⑤　内的システムはさらに外的システムに反作用して「全社会システム」（total social system）を形成する（Homans, 1950, pp.81-130）。



この段階で，ホーマンズは次のように述べている。「気が付いたら，私たちは一巡してスタート点に戻っている。これは悪い論理の結果ではなく，研究対象の性質の結果である。有機的現象を言葉で記述する方法は他にない。本書の冒頭に掲げた一節で，クロード・ベルナールが指摘したように，生命過程をあらわすにふさわしいシンボルは自分の尾を噛んでいる蛇である。」（p.150）。

ホーマンズはこの概念図式を，他の学者によって実施され公刊された五のフィールド研究に適用した。そのため，まず，それぞれの学者によって使用された用語の意味論的分析を通して，彼らによって観察された事実が何であったかを明らかにし，次に，その概念図式に基づいて，明らかにされた観察事実を四つの要素（相互作用，感情，活動，規範）に分析し，最後に，それらの要素間の関係について経験命題を体系的に記述した。いわゆる法典編纂（cordification）の手法を用いて《ミクロ世界の総合》を行った。

ホーマンズは《ザ・ソサエティ・オブ・フェローズ》の若手研究員（ジュニアー・フェロー）として，ベルナールを最もよく知るヘンダーソンからベルナールについて学んだ。今，こうしてベルナールについて知るにつれ，あらためて，ホーマンズがベルナールからいかに大きな影響を受けていたかを認識させられる。そして，ベルナールの言葉をエピグラフとして引用した事の重さを知らされる。

4　『社会行動』とチョーサー

次に，『社会行動』のエピグラフを取り上げることにしよう。

> みなさん，ここでひとこと申し上げたいのです。友人同士，末永くつきあいたいなら，たがいに譲りあうようにしなければならない。愛も権力で圧迫してはいけない。支配権がでてくると，愛の神は羽ばたきして，さらばと，行ってしまうものだ。
>
> ジェフリー・チョーサー
>
> 郷士の話

（1）　チョーサーの『カンタベリー物語』

そのエピグラフはチョーサー（Geoffrey Chaucer　1337－1400）の『カンタベリー物語』（*The Canterbury Tales*）の「郷士の話」（The Franklin's Tale）からの引用である。

ホーマンズは英米文学専攻の学生であったから，多くの英米文学関係の本を読んだであろう。しかし，この『カンタベリー物語』をその中の単なる一冊と見なすことはできない。

彼は《ザ・ソサエティ・オブ・フェローズ》の社会学専攻の研究員として，研究の対象として13世紀のイギリス農民を選び，その地における農民の生活を，機能主義的人類学の方法で研究した。イギリスに出向き多様な歴史的文献を精査しながら，混沌としているかのように思われる社会の諸側面がいかに相互に関係し合って秩序を成しているか，具体的には，いかに相続慣習と農業経営形態とが相関しているかを明らかにした。その成果が『13世紀のイギリス農民』（1941）である。その研究において，中世英語で書かれた『カンタベリー物語』は貴重な史料であった。この本はカンタベリー大聖堂にある聖トマス・ア・ベ

ケット廟に詣でる人々が，旅のつれづれを慰めるために道中余興として話した物語を一つにまとめたものである。そこに参加した人々は，騎士，粉屋，親分，料理人，法律家，バースの女房，托鉢僧，刑事，学僧，貿易商人，騎士の従者，郷士，医者，赦罪状売り，船長，尼寺の長，チョーサー，修道院僧，尼寺侍僧，第二の尼，僧の従者，大学賄人，牧師，宿屋の主人といった様々な身分・職業の人々であり，まさに中世社会の縮図であった。これは中世の人々の生活を知る貴重な史料であった。ホーマンズは，クリスマスについて（Homans, 1941, p.359），結婚について（p.170），司祭の実態について（p.61），粉屋の実態について（p.285），土地保有者層について（p.250），この本から引用をしている。ホーマンズは，文学的関心と社会学的関心から，本書を精読した上での，引用であると考えられる。

エピグラフを引用した「郷士の話」は次のような話である。

幸福な結婚をしたブルターニュの騎士アルヴェラグスは，愛妻ドリゲンをブルターニュに残してグレートブリテン島の武者修行に行った。その留守の間に，アウレリュウスという若者が彼女に恋い焦がれ愛を告白した。ドリゲンはアウレリュウスの求愛を断るため，現実では絶対起こりえない無理難題，もし満潮を起こして暗礁をなくしてくれたなら，その求愛を受けてもいいと約束した。そこで，アウレリュウスは，多額の報酬を約束して，学者に満潮を起こして暗礁を消すように頼んだ。学者は苦労して修得した奇術によって満潮を起こし暗礁を消した。それを見たドリゲンは驚き，絶望して，悲しみのあまり自殺を覚悟した。そこに夫のアルヴェラグスが修業を終え，帰ってきた。泣き悲しむ彼女からことの一部始終を聴いた夫は，その結果がいかに悲しく苦しいものであっても，約束は守るべきであると妻に命令した。妻ドリゲンは身を任す覚悟で約束の庭園に行く途中で，その若者アウレリュウスに会った。そして，若者に，

「庭園に行くところです，私の夫が命じましたように。私の約束を守るために。ああ！　本当に悲しい！」と言った。それを聞き感動した若者は「あなたがた二人の愛情を断ち切るよりも，むしろ自ら悲しみに耐えた方がいい」と，その約束を反古にし，彼女を家に帰した。しかし，彼には莫大な報酬千ポンドを魔術師に払う約束があった。有り金全部持って魔術師の所に行き，足りない分を分割で払うことの許しを願った。そして，彼女との約束を反古にした経緯を話した。それを聴いた学者は，「あなたがたのいずれとも同じように高貴な行いができないとしたら恥になります」と言って，「お前さんの千ポンドを放免してさしあげよう」と言って去って行った。

この「郷士の話」に出てくる貴婦人ドリゲンと騎士アルヴェラグラスの結婚生活が平安で幸せであるのは，「互いに譲り合って」いるからであり，また，「権力」を振るって互いの自由を圧迫していないからであることが示唆されている。

ここから，著者はそれを一般化して次のように言うのである。「みなさん，ここでひとこと申し上げたいのです。友人同士，末永くつきあいたいなら，たがいに譲りあうようにしなければならない。愛も権力で圧迫してはいけない。支配権がでてくると，愛の神は羽ばたきして，さらばと，行ってしまうものだ。」と。

（2）　ウイリアム王子とキャサリン妃の結婚式と主教の祝辞

2011年４月29日，ウエストミンスター寺院でウイリアム王子とキャサリン妃の結婚式が挙行された。その様子は日本でも即時通訳付きのテレビで放映された。豪華な挙式が厳粛に進む中，ロンドン主教リチャード・シャルトル師のお祝いの説教が始まった。結婚する二人がどのような人間関係を結ぶべきかについてやさしい説教が続いた。もちろん，私はお祝いの気分で，即時通訳でその説教を聞いていた。すると，主教がイギリスの詩人チョーサーの言葉を引用した。しかも，驚いたことに，その言葉はホーマンズがエピグラフとして『社会

行動』で用いた言葉であった。後日，*Independent Catholic News*に掲載されているロンドン主教の祝辞の全文をインターネットから入手できた。関係個所を訳すことにする。

> 結婚は夫と妻が互いに協力して芸術作品を作るように変わるべきです。相手を変えてやろうという野心を抱かいない限り，そのように変わることは可能です。御霊が流れる時，強制はそこにはありません。お互いが相手に場所と自由を与えねばなりません。ロンドンの詩人チョーサーは，これを短い言葉で表しました。
>
> 支配しようとすれば愛の神はすぐにその翼をはばたかせて，
> はいさようなら！と去ってしまいます。
>
> （桝井廸夫訳　岩波文庫　下　250頁）
>
> 西洋では多くの生活から神の実在が消え去っています。それに対応して，人間関係だけが人生に意味と幸福をもたらすことができるのだという期待が過剰に高くなっています。これは相手に負いきれない大きな重荷を負わせることになります。私達は皆不完全です。私達皆に必要なものは，ゆるぎない愛であり，抑圧ではありません。豊かになるために，お互いに赦し合うことが必要です。

これぞまさに結婚生活にとって至言であるといえよう。

（3）『社会行動』とチョーサーの名言

最後に，この至言と『社会行動』との関係を詳しく見ることにしよう。このチョーサーの言葉は，その本の12章「リーダーシップ」の中で言及されている。

リーダーとは集団目標を達成するために，部下に命令を出し，服従されている人である。音楽の世界では指揮者，スポーツの世界では監督，会社の世界で

は社長，軍隊では指揮官，国家では大統領あるいは首相がそうである。このような人がリーダーとか，支配者とか，権力者と呼ばれる。

リーダーは命令を出して，部下に彼の求める行動をとらせる。これは部下の自由を奪う行為である。その命令に従っても，その行為は監視され，時には，罰を受けることもある。また，その行為が成功しても報酬がすぐくるとは限らない。このように，リーダーとは罰を与えることの多い怖い存在であり，部下の自由を奪う存在である。部下にとっては，そのような罰や，強制や，自由剥奪からの回避は報酬である。部下は，リーダーを尊敬しても，好きにはなれない。部下はリーダーを敬遠し，回避しようとする。その結果，たとえリーダーとしての役割を立派に果たしていても，リーダーは孤独になり，また，集団の中で最も畏怖され，嫌われる。ホーマンズは「チョーサーが本書の冒頭の引用句――支配権がでてくると，愛の神は羽ばたきして，さらばと，行ってしまうものだ――で言わんとしていたことを，ここで思い出してほしい」（Homans, 1974, p.295, 訳426頁）と言っている。

「指揮」と「親交」，「支配」と「好意」，「権力」と「愛」，これらは両立し難いアンビバレントな関係にある。

リーダーにとっても，部下から敬遠されること，孤独にされること，嫌われることは，嫌な事であり，罰である。従って，リーダーもこれらを回避したくなる。命令を控え，彼らとの親交を求めて近づいて行きたくなる。しかし，部下は経験をとして，リーダーは嫌われることを恐れてはならない，命令を出すことを躊躇してはならない，リーダーは孤独に耐えねばならない，リーダーは部下と一定の距離をとり公正であるべきである，といったリーダーへの期待をもっている。部下に親交求めて接近したり，命令を控えたりすることは，部下のリーダーへの期待を裏切ることになり，部下は彼のリーダーシップを疑うようになる。まさに「馴れすぎは侮りを生む」（Familiality breeds Contempt.）のである。リーダーがリーダーであるためには，孤独に，忌避に，敬遠に耐え

ることができねばならない。

しかし，友人関係や夫婦関係においては重要なのは，お互いに対する愛，親密な交わり，好意である。従って，チョーサーの言うように，「支配」や「権力」の介入は控えるべきである。心理カウンセラーの黒岩貴も『他人支配をやめると幸せになる』と言う。しかし，公的な生活場面では，集団目標を達成するためには，リーダーが部下に命令し，部下を服従させることが不可避である。しかし，このような世界でも，「愛」や「好意」や「親交」への欲求は抑圧されたままではない。人々はそのような欲求が満たされる場を求める。それが地位の平等な人々よりなる社交的な私的な場である。人々はそのような場で，お互いにくつろぎ，リラックスし，友情や親交を深める。これが進むと，集団の中に，上・中・下といった階層が形成されることになる。

また，ホーマンズは「支配しようとすれば愛の神はその翼をはばたかせて，はいさよなら！と去ってしまします」という命題を用いて，人類学者が関心を持った制度，父系社会に多く見られる交叉イトコ婚の成立を説明している。

5　『社会科学の性質』とレヴィ=ストロース

最後に，『社会科学の性質』のエピグラフを見ることにしよう。

> 最も単純な表現にまで還元された社会を，私は探していたのではなかったか。ナンビクワラ族の社会がそれであった。私はもうそこに，人間だけしか見出さなかった。
>
> レヴィ=ストロース
>
> 『悲しき熱帯』

このエピグラフは，『悲しき熱帯』（1955）の訳者である川田順造が「『悲しき

熱帯』の中でも，ブラジル北西部高地に住むインディオ，ナンビクワラ族についての記述は，精彩に富んでいる。後にレヴィ=ストロースが『親族の基本構造』で展開した，互酬関係の一部をなす女性交換システムとしての婚姻という考え方の萌芽も，この社会についての考察のうちに見出すことができる」（川田順造 1996　123頁）と特に注目した「第７部　ナンビクワラ族」からの引用であった。

これまでのエピグラフに選ばれた人は，ベルナールにしてもチョーサーにしても，ホーマンズとは肯定的な関係にある人物であった。ところが，レヴィ=ストロースは理論上対立する人物であった。レヴィ=ストロースは構造主義者であり，ホーマンズは方法論的個人主義者であった。にもかかわらず，ホーマンズはそのレヴィ=ストロースの書物の一文をエピグラフとした。彼はこの一文をレヴィ=ストロース自身の理論的立場と矛盾するものであり，ホーマンズの理論的立場を支持するものと理解したと思われる。従って，この引用には辛辣な皮肉が込められていると言える。

1947年，レヴィ=ストロースは大著『親族の基本構造』（*Les Structures elementaires de la Parenter*）を出版した。彼は，その著書で，未開社会おける婚姻制度を取り上げ，その中で，なぜ「母側交叉イトコ婚」（*Marriage, Authority and Final Causes*）が広い地域で優先され，婚姻制度として採用されているかを構造主義的に説明した。これに対して，1955年，ホーマンズは小さな本『結婚と権威と目的因』で，レヴィ=ストロースの説明の不十分さを指摘し，それに代わる方法論的個人主義の立場からの説明を提唱した。

（1）　レヴィ=ストロースの説明

レヴィ=ストロースは未開社会で観察される婚姻制度を取り上げる。近親婚（父と娘，母と息子，兄弟と姉妹の婚姻），平行イトコ婚（父の兄弟の娘と私との結婚，母の姉妹の娘と私との結婚），交叉イトコ婚（父の姉妹の娘と私の結婚，母の兄弟の娘との結婚）である。この中でも，多く観察される婚姻制度は

交叉イトコ婚である。さらに細かく見ると，交叉イトコ婚は，両側交叉イトコ婚（父の姉妹の娘とも，母の兄弟の娘とも，結婚がゆるされる制度），母側交叉イトコ婚(母の兄弟の娘との結婚のみが許される制度)，父側交叉イトコ婚(父の姉妹の娘との結婚のみが許される制度）の３種に分類される。しかし，現実に広く観察され実行されているのは母側交叉イトコ婚であった。

なぜ多くの未開社会で「母側交叉イトコ婚」が婚姻制度として存在するか。この説明にレヴィ=ストロースは取り組んだ。

彼はこの結婚制度が理想的に実行されたらどうなるかを系図表を用いて論理的に考察する。Ａのリネェジ（血縁集団）の男はＢのリネェジから女を貰い，Ｂのリネェジの男はＣのリネェジから女を貰い，Ｂのリネェジの男はＣのリネェジから女，Ｃのリネェジの男はＤのリネェジから女を貰い……最後のリネェジの男はＡのリネェジから女を貰い結婚することになる。こうして，Ａのリネェジは，Ｂのリネェジから女を貰い，ぐるりと回って，最後のリネェジに女を提供している。まさに「女は天下の回りもの」である。母側交叉イトコ婚が理想的に守られたなら，このような女の交換が円滑に実行される。交換は滞ることなく社会全体に拡大される。このような交換を，レヴィ=ストロースは「一般的交換」（generalized exchange）と呼んだ。

この一般的交換の持つ意味は大きい。それはリネェジ間の互酬的な相互関係を促進し，社会の有機的連帯を深め，社会の統合を高め，社会の存続に大きく貢献をする。故に，このような機能を持つ「母側交叉イトコ婚」が優先され婚姻制度として存在するのである。反対に，近親婚，平行イトコ婚，両側交叉イトコ婚，父側交叉イトコ婚ではそのような一般的交換は不可能である。故に存在しないのである。

（２） ホーマンズの説明

ホーマンズはこのレヴィ=ストロースの説明法は，例えば，家の存在を，人

間が厳しい環境の中で生き延びるためという目的によって説明する，いわゆる目的因による説明であり，それだけでは十分でない，それは，また，大工が石を積み上げて造ったからから存在すると説明する，いわゆる作用因による説明が必要である，レヴィ=ストロースの「母側交叉イトコ婚は社会の有機的連帯を強め，社会の統合を高め，社会の存続を可能とする」から存在するという説明には作用因による説明が欠けていると批判した。そもそも，母側交叉イトコ婚はいかなる力が作用し合って生み出されたのか，この問題に答えるのが，作用因による説明である。その説明をすることが，ホーマンズの課題であった。

ホーマンズは人類学者シュナイダーの助けを得て人類学の山積する知見をしらべた結果，母側交叉イトコ婚は父系社会に多く見られることを発見し，両者の関係に注目した。

父系社会では，権威（権力，支配権）は父あるいは父系親族にゆだねられている。権力を持つ人（父親）はその集団の規範に従て集団成員に命令を下す権限を持ち，成員（子供）は嫌でもその命令に従う義務を負った。そのような関係では子供は父親に対して敬って遠ざかるというアンビバレントな感情をもつ。怖くて慣れ親しめない。父親を敬遠した子供は愛情とやさしさとくつろぎを求めて母親のもとに逃げた。母親は権力を振り回さないし，命令もしない。甘えを許し，安らぎを与えてくれる存在であった。

ここで，『社会行動』のエピグラフを思い出す。

> 支配しようとすれば愛の神はすぐにその翼をはばたかせて，
> はいさようなら！と去ってしまいます。

父系社会では，母とその兄弟は被保護・保護の関係である。子供にとって，母の兄弟は「男の母親」である。この叔父も，母親と同じように，権力をかざしたり，命令を出したりはしない。その結果，子供は母の兄弟であるオジを頻

繁に訪ねるようになる。オジを訪ねることが多くなればなるほど，その娘（母側交叉イトコ）と会うことが多くなる。つきあうことが多ければ多いほど，相互に好意を持つようになる。好意を持てば持つほど，さらに付き合いが多くなる。こうして，二人は結ばれ，結婚することが多くなる。いわゆる，母側交叉イトコ婚の成立である。

同じような構造を持つ集落では，同じような現象が頻繁に起こる。母側交叉イトコ婚があちこちで行われる。その結果，それが好ましいことであり，当然であり，さらには，規範になる。

このような対人における感情関係の流れの中から，父系社会では，母側交叉イトコ婚が優先され，規範となり，制度となった。

こうして生まれた制度が社会の有機的連帯を強め，社会の存続に貢献していることを知った人々は，さらに，その制度を強化し，遵守したと思われる。この制度のすばらしい機能を認識した人は，似たような環境で，この制度，あるいは似た制度を作ろうとするであろう。

ホーマンズはレヴィ=ストロースの構造主義や，社会学者T．パーソンズの機能主義の説明，すなわち，制度の存在を社会的連帯の強化や社会の存続への貢献で説明に対して，繰り返し，「人間を取り戻せ」（Bringing Men Back In, 1964）と批判している。ホーマンズの「母側交叉イトコ婚」の説明も，レヴィ=ストロースの社会的連帯への貢献による説明では不十分であるとして提唱されたものであり，そこでの主役は喜怒哀楽の渦中にある人々の行為のやり取りである。人間の行為を無視しては説明できない。「人間を取り戻せ」と訴えるのである。構造主義者レヴィ=ストロースはフィールド調査の中で感動をもって書いた。

> 最も単純な表現にまで還元された社会を，私は探していたのではなかったか。ナンビクワラ族の社会がそれであった。私はもうそこに，人間だけし

か見出さなかった。

（4） ホーマンズの科学論

『社会科学の性質』はホーマンズの科学論を論じた著作である。彼ほど理論とは何かを考えた社会学者はいない。ベルナールやヘンダーソンを通した学んだ科学の哲学がそれを可能としたと思う。その要点をあげることにする。

① 理論の本質では社会科学も自然科学も同じである。

② ある現象の「理論」とは，その現象の「説明」である。

③ 説明とは少なくとも２つの属性間の関係を述べる命題のセットよりなる。

④ その命題のセットは少なくとも３種類の命題よりなる。

(a) 経験命題（empirical ptoposition）

観察や統計によって発見された命題。被説明項（explicandum）とよばれる。

(b) 一般命題（general proposition）

発見された経験命題を説明する命題。法則と呼ばれることもある。

(c) 与件（given）

これは説明の対象ではなく，説明項を構成する不可欠の命題。初期条件とか境界条件との呼ばれる。

⑤ この３命題は演繹体系（deductive system）を構成する。被説明項である経験命題が与件の下で一般命題から演繹される。演繹された時，その経験命題は説明されたと言う。

⑥ 同一の一般命題から多様な所与のもとで多様な現象が演繹され，説明されるとき。その理論はカバーリング・ローズ・セオリー（covering laws theory）と呼ばれる。ニュートン力学がいい例である。万有引力の法則からいろいろな与件のもとで，りんごの落下，惑星の動き，打ち上げロケットの

軌道が説明できる。

このような理論観をもとに，ホーマンズが具体的にどのように理論構築をしたかを見ることにしよう。

① 山積している多量の知見を，彼の概念図式に基づいて，整理し，経験命題の体系を作った。『人間集団』の段階の仕事である。

② この経験命題の体系をつくり，現象と慣れ親しみながら，これらの経験命題を説明できる一般命題を探し求めた。この態度を，ホーマンズは。『感情と活動』のエピグラフで表現している。

> こういうわけで，外観について彼女が把握したものは，原因についての理解とは不釣り合いなほど多かったけれども，同時にたちまち彼女を襲ったのは，外観の事実を確実に把握し，しかるべく整理することさえできれば，背後に潜みながら揺れ動く外観の陰に隠れて眼にとまらなかった原因は，おそらく姿を現さざるをえないだろう，という気持ちだった。
>
> ヘンリー・ジェイムス　『金色の盃』

③ こうして，ホーマンズは，一般命題を，《ザ・ソサエティ・オブ・フェローズ》の研究員の仲間であった友人スキナー（F. Skinner）の行動心理学の中に見つけた。その一般命題は(a)成功命題，(b)刺激命題，(c)価値命題，(d)剥奪飽和命題，（5）攻撃是認命題であった。それは機能理論や構造主義の「社会の存続や連帯の維持について」の命題でなく，「行動をその行動のペイオフの関数と見る」人間行動についての命題であった。

> 私はもうそこに，人間だけしか見出さなかった。

④　この一般命題によって支配されている人々の行為のやり取りから，いかにして社会構造が生まれ，維持され，変えられるかを説明した。その成果が『社会行動』である。これが，いわゆる《交換理論》である。

5　結び

ホーマンズという人物は研究すればするほど魅力の増す社会学者である。その魅力は，多分彼が若い時に，学際的な研究機関《ザ・ソサエティ・オブ・フェローズ》に所属し，ハーバードを代表する偉大な教授，天才的な才能をもつ多分野の仲間と一緒に研究し，議論し，鍛え合うことによって身に付けたものであろう。

ホーマンズは真に学際的な社会学者であるが，社会学の世界では「一匹狼」と言われるユニークな社会学者である。

参考文献

Bernard, Claude, 1865, *Introduction a da medicine experimentale*.（三浦岱栄訳『実験医学序説』岩波文庫　1970）

Chaucer, Geoffrey, 1387-1400, The Canterbury Tales.（西脇順三郎訳『カンタベリ物語』ちくま文庫　1972，桝井廸夫訳『カンタベリ物語』岩波文庫　1995）

Colerige, S. T, 1828, *Collected Poems*.

Goethe, 1808, *Faust*,（大山定一訳『ファウスト』筑摩世界文学大系　1972）

Homans, George. C, 1934, *An Introduction to Pareto*.

———, 1941, *English Villagers of Thirteenth Century*.

———, 1950, *The Human Group*.

——— and Schneider, D.M, *Marriage, Authority and Final Causes*.（青柳真智子訳『交叉イトコ婚と系譜―レヴィ=ストロース学説批判』誠信書房　1976）

———, 1961, *Social Behavior*.

———, 1961, *Sentiments & Activities*.

———, 1964, “Bringing Men Back In,” *American Sociological Review*, 29.

———, 1967, *The Nature of Social Science*.（橋本茂訳『社会科学の性質』誠信書房

2001）
———, 1968, “Henderson”, in *International Encyclopedia of Social Sciences*.
———, 1974, *Social Behavior. Rev, ed.*（橋本茂訳『社会行動』誠信書房　1978）
———, 1984, *Coming to My Sense*.
———, 1987, *Certainties and Doubts*.
———, 1988, *The Witch Hazel*.
James, Henry, 1904, *The Golden Bowl*.（青木次生訳『金色の盃』講談社文芸文庫　2001）
Levi-straus,1949, *Les Structures elementaires de la Parenter*.（馬淵東一他訳『親族の基本構造』番町書房　1977－78)
———, 1955, *Tristes Tropiques*.（川田順造訳『悲しき熱帯』中公クラシック　2001）
天野陽子　2014「内部環境概念からホメオスタシス概念への展開 ―ベルナール，ホールデン，ヘンダーソン，そしてキャノン―」『生物学史研究』No.90
川田順造　1996『ブラジルの記憶』NTT出版
黒岩貴　　2010『他人支配をやめると幸せになる』小学館　2010
斎藤勇　　1984『カンタベリー物語』中公新書
橋本茂　　1965「ホーマンズの方法論について」『社会学研究』26号
————，1998「ホーマンズと The society of fellows」『明治学院論叢』580号
————，2005『交換の社会学』世界思想社
橋本茂　小林義寛　澤野雅樹　1985「交叉イトコ婚をめぐる論争」『明治学院論叢』382号